

ルポ
◆
精神病棟

大熊一夫

朝日新聞社

大熊一夫（おおくま かずお）

1937年東京に生まれる。東京大学教養学科科学史・科学哲学分科卒業。1963年朝日新聞社入社。社会部員などを経て現在『週刊朝日』副編集長。

ルポ・精神病棟

昭和56年 8 月20日 第1刷発行

定価 340 円

昭和56年 9 月20日 第2刷発行

著 者 大熊一夫

発行者 初山有恒

印刷製本 凸版印刷株式会社

発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地5-3-2

電話 03(545)0131 (代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京0-1730

0136-260244-0042 ©KAZUO OHKUMA 1981

ルポ・精神病棟

大熊一夫

朝日新聞社

表紙・扉 伊藤 鑛治

目次

I	ここを病院だと思っ てはいけない	13
	招かれざる客	13
	便所の穴とともに	16
	十五歳の捨て子	20
	檻	24
	焼けたピンセツ ト	28
	牢名主	31
	ノックは不要	37
	ふり出しに戻る	41
	ご回診	44

都議選異聞

私刑

搾取

置き去り

Ⅱ 賛否のるつぼ

眼の前が真っ暗

一部の悪徳病院を誇張した罪

まじめな人をがっかりさせた罪

センセーショナルの罪

政治が悪いからだ、といわない罪

神のごとき……

Ⅲ 蒸発者が殺人者になるまで

殺人者からの手紙

強制収容所における人間行動

汚辱の歴史

拘置所からの告発

Ⅳ 株式会社「精神病院」

わてのいう通りしはったら

死因のナゾを追って

くすり漬けの恐怖

もうけたのは誰か

ある会計報告

Ⅴ 「ぬけさくタヌキ」

精神病ってなんだ

クビにされた側の論理

クビにした側の論理

「ぬけさくタヌキ」は誰か

198

Ⅵ 処分を請け負う人たち

204

ギャング部屋の反乱

204

電バチぼけ

208

西瓜割り

214

一見、科学的な……

218

未婚の母

226

抹殺への道

231

あとがき

237

文庫版あとがき

239

ルポ・精神病棟

「我邦ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ
生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」——日本の精神医学
の父、故奥秀三東大教授の大正七年の実態調査報告から。

昼めしで、アジの干ものの頭を残した。私がもう頭を食べないとわかった瞬間、患者たちの間で奪い合いが始まった。東京のある精神病院。私はアル中患者として二月初旬に入院した。三週間は居るつもりだった。が、十二日目に精根つき果てた。

退院の日、背中に突き刺さった患者たちのまなざしを忘れることができない。彼らは、留置場、刑務所以下の生活を強いられ、いつ出られるとも知れない身だった。最新刊(昭和四十五年一月)の日本精神神経学会の機関誌『精神神経学雑誌』によれば、「患者を虐待する、狂った精神病院」が多い」という。私の入院先もその例外ではなかった。

友人と妻に抱えられ、その朝、私は精神病院の門をくぐった。かなり酔っていた。零細な印刷屋の長男、飲むとからみ、妻をなぐる、仕事もサボる、幻聴もあるらしい……こんな経歴のニセ・アル中だった。専門医が診断すれば、いっぺんにバレルのではないか。そんな不安もあった。院長は、私の目玉の中をのぞいた。

「ほー、こりゃ飲んでる。入院だ、入院だ」

一分たらずの診断で、ニセ患者は、入院を必要とする重症患者に変わった。

保護室に入れられた。広さは約三畳、べっこう色に変色した畳に、フケだらけのせんべいぶとん、コンクリート・ブロックの壁、北側の壁に、鉄格子入りの天窓、部屋のすみに便所の穴が見

える。絶えず、便所の土管から臭気が吹き上げてくる。駅の公衆便所に寝るに等しい。暖房はない。水洗のしぶきが床をぬらす。水が凍った朝もあった。

保護室と隣り合って、不潔部屋というのがあった。廊下とは鉄の柵で仕切られている。動物園の檻に似て、もっと薄暗い。「不潔部屋」の表札は、病院側の手で掲げられていた。そこに失禁の老人など十人ほどが寝ていた。部屋のすみには、例の便所の穴。柵の外に手を出して栓を押せば、穴の底を水洗の水が流れる。世話する人もなく、外へ出られない老人たちは、この便所の水で顔を洗い、それを飲む。廊下には、汚物にまみれた下着やおむつが山と積まれ、異臭を放っている。

入院六日目、保護室から大部屋に移された。寝室、食堂、作業場を兼ねた四十五畳。患者二十五人。独房から出た身には広く感じたが、牢獄の雰囲気に変わりはない。火の気なく、窓にはさびた鉄格子、玄関に向かう通路に、ぶ厚い鉄製の扉がある。

大部屋生活の初日、妻から弁当箱で、炊き込みごはんの差し入れが届いた。連日の冷えと運動不足で食欲がない。「だれか食べませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと寄ってきた。二十秒ほどで平らげた。「あーあ、シャバめしはうめえなあ」。「シャバ」という言葉を一日に何回聞いたことか。

日本医師会の武見太郎会長は、「精神病院の経営者は牧畜業者と同じである」と、かつて述べた。

病む心と医師がふれ合う所が病院であって、ここは「病院」の名をかたる「人間の捨て場所」

であった。医師との接触はほとんどなく、入院したが最後、病状も退院時期もわからない、いわば不定期刑なのだ。もし……、もし逃げてでも失敗すれば恐るべきリンチが待っている。

〔注〕 以上の文章は、私が昭和四十五年三月五日から『朝日新聞』夕刊社会面に連載した「ルボ・精神病棟」の第一回の記事である。ルボは計七回連載された。

入院者の痛みは、入院者になってみなければ、わからない。だから、私は患者として入院した。ルボが新聞に出て三年ちかくたった。精神医療に全くのしろうとだった私も、その後、取材を通して貴重な体験を積んだ。その蓄積を踏まえて、改めて「ルボ・精神病棟」を書こうと思い立った。

I ここを病院だと思つてはいけない

招かれざる客

45年2月5日 目が覚めた。物音ひとつしない。真夜中のようだ。寒い。パンツの下から、小さなメモ用紙と手帳用の豆えんぴつを取り出す。シャツの下に隠しておいたら、着替えのときバレるところであつた。きょう一日のことを思い出しながら書く。

朝八時に目を覚ました。まくら元に用意しておいた日本酒の四合びんを飲みほした。緊張のせいか、思うように酔えない。酒に強いのもこういうときは困る。ウイスキーをグイとラッパ飲みした。

九時。予約のタクシーが来る。妻と乗り込む。

酒ヤケもしていないのに、はたして入れてくれるだろうか。もつと周到に、アル中のしぐさを勉強すべきではなかったか……。あれこれ考えると、とても笑顔なんてできない。車にゆられたら急に酔いが回ってきた。吐いた。運転手の迷惑そうな目。酒を飲んで吐くような弱々しいアル

中なんて。あやしまれないだろうか……。

途中で社会部の佐藤国雄記者を拾う。佐藤氏と妻に両わきを抱えられて病院の玄関をはいった。看護婦が「男の人来てくださーい」と叫ぶ。すぐ診察室へ通される。

医師が懐中電灯で私の目の玉を照らし、中をのぞいた。

「こりゃー飲んでる。入院だ、入院だ」

《あとで、この医師は院長であることを知った》

一分たらずの診察の結果、白衣を着た屈強な男に抱えられて奥へ連れていかれた。妻が私のあとを追おうとしたら、金切り声が飛んだ。

「ここから先は、家族の方はご遠慮ください」

重そうな鉄の扉をあけると、そこは薄暗い病棟の廊下だった。たむろしていた十数人の患者の、ドロとした力のない視線が、私に集中した。朦朧とした頭の中で「こわい」と感じた。

《大変恥ずかしいことだが、当時、私は精神障害者はこわい、という偏見を捨てきっていなかった。しかし、この入院生活を経たいま、その認識がいかに間違っていたか、反省している》

廊下のゆき止まりにある独房（保護室と呼ばれる）に入れられる。車中で吐いて衣服をよごしたため、パンツ一枚にされる。ネルの、ひぎ小僧が出るようなつんつるてんの寝間着を着せてもらう。酒で頭がよく回転しない。ヨスは寢床に横になった。

ガーン。さびた鉄の扉が荒々しく締められた。錠がかけられた。覚悟の上とはいえ、その瞬間から私がわめこうが、どうしようが、その声は絶対に外に届かない。『密室の中の密室』である。

不審死があっても、うやむやに片づけられてしまうのが保護室だ、と聞かされていた。

もし身分がバレたら、どうなるだろう。間違**つて**注射でもされて、「事故死」で……。妻が退院を願**い**出ても「そんな人はいない」といわれたら……。あれこれ思いめぐらすと、心細くもなる。

昼ごろだろうか。だれかがアルミの盆をガチャーンと乱暴に置いたので目が覚めた。昼めしだった。酒と緊張とで食欲がない。放**つたら**かして、さらに眠**つた**。こんどは看護婦にゆり起**こ**された。

「あなたはごはんを食べないから、ブドウ糖の注射をしましょう」

でかい注射が左腕に刺**さ**った。

また眠る。白衣の男性に起**こ**される。顔写真をとられた。患者が多**すぎ**て、写真でも張り出**し**ておかないと顔を覚えられないの**だろ**うか。それとも、脱走した**とき**の手配写真？

夕食が運ばれてきた。油揚げ、千六本に切**つた**大根とニンジン**の**煮つけ。たくあん三切**れ**。冷えたみそ汁の具はジャガイモと白菜。冷たい麦めし。手をつけな**かつた**。

看護「夫」さんが、白い粉ぐすりを口に入れてくれた。「これを飲**むと**、よく眠れる**から**ね」。思**い**のほかやさしい声**だ**った。

アル中でもないのに、アル中と偽**つて**病院には**い**った。人を騙**ま**すのは、気分**の**いいものではな**い**。とくに、夕方、くすりを口に入れてくれた看護「夫」さんのように、やさしい声をかけられ**ると**、「申し訳**な**い」と思**う**。